

## 女性管理栄養士が有するキャリア発達上の課題

### —自尊感情と自己効力感に注目して—

Problems that Female Registered Dietitians have with carrier development

—Focused on self-esteem and generalized self-efficacy—

彦坂 令子<sup>1</sup>, 戸田 里和<sup>2</sup>, 岩瀬 靖彦<sup>1</sup>

<sup>1</sup>大妻女子大学家政学部, <sup>2</sup>大妻女子大学人間生活文化研究所

Reiko Hikosaka<sup>1</sup>, Satowa Toda<sup>2</sup>, Yasuhiko Iwase<sup>1</sup>

<sup>1</sup>Department of Food Science, Otsuma Women's University

12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan 102-8357

<sup>2</sup>Institute of Human Culture Studies, Otsuma Women's University

12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan 102-8357

キーワード：卒業生, 女性管理栄養士, 自尊感情, 自己効力感,

Key words : Graduates, Female Registered Dietician, Self-esteem, Self-efficacy

#### 抄録

本研究は、栄養士養成施設卒業生の現状を自尊感情と自己効力感を用いて検討し、女性管理栄養士が有するキャリア発達上の課題を探った。その結果、女性管理栄養士の自己効力感については、一般的な傾向が見られ、自尊感情と自己効力感には正の相関が確認された。得点化された自尊感情と自己効力感がどちらも低い者は、7.6%存在した。自由記述からは、社会復帰への不安や、育児・家族のケアなどの家庭内の課題による個人的な要因、保育園不足による社会的な要因が確認されたが、半数以上は無回答であった。今後の課題としては、継続調査の必要性と、現役・潜在管理栄養士の自尊感情や自己効力感を向上させるためのリカレント学習や、スキルアップに関連する教育内容を充実させることが重要であると考えられた。

#### 1. 緒言

超高齢社会ではスペシャリストな管理栄養士が必要であると位置づけられている。また、核家族化や共働きの増加など食生活をめぐる環境の著しい変化や、栄養の偏りや欠食など食習慣の乱れによる肥満や生活習慣病の増加、さらに食品の安全性への不安の高まりなどの課題対応も加わり、管理栄養士の知識や技術の高度化・専門化がますます期待される。一方で、管理栄養士の業務範囲は拡大し仕事量も増大するなど、管理栄養士が直面している課題も容易に推察される。先行研究には、管理栄養士などの地域保健従事者の資質の向上に関する施策の充実が図られても、従事者自身が、自己の能力を高めていく努力、自己啓発意欲がなければ資質の向上にはつながっていかないという指摘もある<sup>[1]</sup>。

本研究では、現役管理栄養士・潜在管理栄養士の自尊感情と自己効力感を用い女性管理栄養士が有するキャリア発達上の課題について探索的に検討し、大学教育の質的改善と向上を目指すことを目的とした。

#### 2. 調査対象および方法

##### 2.1 対象者と調査期間

本学家政学部食物学科を卒業した栄養士・管理栄養士就業者の組織「あじさい会」に所属する管理栄養士を対象とした。インターネットによるアンケート調査を実施し、調査期間は2017年11月29日～12月29日であった。調査協力依頼状送付数128票、回収数100票、うち記入漏れ、記入ミスを除いた合計98票を分析対象とした（有効回収率76.6%）。

なお、本研究は平成29年10月12日に大妻女子大学生命科学研究倫理審査委員会の審議により倫理的配慮において承認を受けて実施した。(受付番号29-019-1)。

## 2.2 質問内容

(1) 属性項目は、年齢、取得資格、居住地域、を尋ねた。

### (2) 自尊感情

自尊感情とは、人が自分自身についてどのように感じるのかという感じ方のことであり、自分の能力や価値についての評価的な感情や感覚のことである。自尊感情を尋ねる項目は、Rosenberg

(1965)<sup>[2]</sup>が作成した尺度の山本ら<sup>[3]</sup>による邦訳版を使用した。この尺度は10項目で構成される。本研究では、「あてはまる」(5)～「あてはまらない」(1)の5件法とした。得点化については、10項目の評定を単純加算し、逆転項目は換算してから加算した。

また、自尊感情の高低の段階については、得点結果から「低い群」「やや低い群」「中間群」「やや高い群」「高い群」の5分類とした。

### (3) 自己効力感

自己効力感 (Self-Efficacy) とは、社会学的学習理論あるいは社会的認知理論<sup>[4]</sup>の中核をなす概念の一つであり、個人がある状況において必要な行動を効果的に遂行できる可能性の認知を指す<sup>[5]</sup>。

自己効力感を尋ねる項目は、Sherer, M. et al.

(1982)<sup>[6]</sup>が作成した自己効力感尺度 (SE 尺度) の成田ら<sup>[7]</sup>による邦訳版を使用した。この尺度は特性的自己効力感尺度と呼ばれるが、本研究では自己効力感とする。この尺度は23項目で構成される。本研究では、「そう思う」(5)～「そう思わない」(1)の5件法とした。得点化については、23項目の評定を単純加算し、逆転項目は換算してから加算し、先行研究の結果<sup>[7]</sup>と比較する。

また、自己効力感の高低の段階については、得点結果から「低い群」「やや低い群」「中間群」「やや高い群」「高い群」の5分類とした。

### (4) 自由記述

①要望欄、②近況報告欄を設け自由記述で回答を求めた。①要望欄に記した内容を下記に示す。

「本年度より、管理栄養士スキルアップセンター <http://www.home.otsuma.ac.jp/food/skillup/> を設置し、有・無職者の研修会を実施しました。今後の事業内容を計画するにあたり、卒業生のニーズを広くうかがいたいと考えています。つきましては、皆様が日頃の生活（仕事、結婚や出産・子育ての体験など）においてお持ちの不安や疑問等や、本学（同窓会組織等）で導入して欲しい、あるいは充実して欲しいことがあれば、下記の欄に自由にご記入ください。」

## 3. 結果

### 3.1 属性

年齢、取得資格、居住地域の基礎集計結果を表1に示す。有効回答者数は98名（有効回収率76.6%）であった。

表1. 属性

数値：% 実数：( )

食物学科卒業生		(98)
平均年齢 (歳)		32.4
年 齢	29歳以下	39.8 (39)
	30-39歳	44.9 (44)
	40-49歳	11.2 (11)
	50-59歳	3.1 (3)
	60歳以上	1.0 (1)
取得資格	栄養士	100.0 (98)
	管理栄養士	96.9 (95)
	栄養教諭	16.3 (16)
	家庭科教諭	0.0 (0)
	その他	12.2 (12)
居住地域	東京	50.0 (49)
	埼玉	16.3 (16)
	神奈川	14.3 (14)
	千葉県	7.1 (7)
	その他	12.2 (12)

対象者の年齢は、20代が約40%、30代が約45%と全体の85%を占めた。

取得資格は、栄養士が100%、管理栄養士が96.9%である。栄養教諭は、平成17年4月より制度が開始され、取得者は16.3%であった。その他には、サプリメントアドバイザー、健康運動指導士、食品衛生監視員、糖尿病療養指導士、NST 専門療法士等、栄養士・管理栄養士の仕事に直接関わる取得資格であった。

居住地域は、東京都が49名(50.0%)、埼玉県16名(16.3%)、神奈川県14名(14.3%)、千葉県

7名(7.1%)であり、全体の9割弱は南関東であった。

### 3.2 自尊感情

#### (1) 基礎的分析

自尊感情尺度 10 項目の平均値は、2.10 から 3.88 の間に分布している(表 2)。平均値の高い項目は「少なくとも人並みには、価値のある人間である」( $M=3.88$ ,  $SD=0.79$ )「物事を人並みには、うまくやれる」( $M=3.84$ ,  $SD=0.84$ )であった。一方、平均値の低い項目は「もっと自分自身を尊敬できるようにになりたい」( $M=2.10$ ,  $SD=0.89$ )「自分には自慢できるところがあまりない」( $M=3.01$ ,  $SD=1.06$ )であった。

表 2. 自尊感情の基礎統計

No.	質問項目	M	SD
1	少なくとも人並みには、価値のある人間である	3.88	0.79
4	物事を人並みには、うまくやれる	3.84	0.84
10	何かにつけて、自分は役に立たない人間だと思う	3.61	1.02
2	色々な良い素質もっている	3.53	0.83
3	敗北者だと思うことがよくある	3.53	1.19
6	自分に対して肯定的である	3.26	1.04
7	だいたいにおいて、自分に満足している	3.20	1.13
9	自分は全くだめな人間だと思うことがある	3.03	1.26
5	自分には自慢できるところがあまりない	3.01	1.06
8	もっと自分自身を尊敬できるようにになりたい	2.10	0.89

#### (2) 得点化と 5 分類

自尊感情の得点の平均は、33 点( $N=96$ ,  $SD=6.57$ )であった。得点の分布状況を図 2 に示す。自尊感情得点は 5 群に分類した(表 3)。

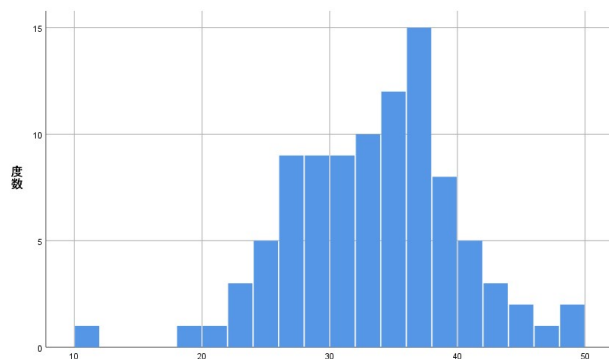


図 2. 自尊感情得点の分布

表 3. 自尊感情得点による 5 分類

分類	低い群	やや低い群	中間群	やや高い群	高い群
自尊感情得点	11~26	27~31	32~34	35~37	38~49
人数	18	20	17	20	21

### 3.3 自己効力感

#### (1) 基礎的分析

自己効力感尺度 23 項目の平均値は 2.41~4.00 となっている(表 8)。平均値の高い項目は「初めはうまくいかない仕事でも、できるまでやり続ける」( $M=4.00$ ,  $SD=0.85$ )、「失敗すると、一生懸命やろうと思う」( $M=3.93$ ,  $SD=0.81$ )、「面白くないことをする時でも、それが終わるまでがんばる」( $M=3.91$ ,  $SD=0.69$ )であった。一方、平均値の低い項目は、「何かしようとする時、自分にそれができるかどうか不安になる」( $M=2.41$ ,  $SD=1.01$ )、「非常にややこしく見えることには、手をだそうとは思わない」( $M=2.69$ ,  $SD=1.10$ )、「私は自分から友達を作るのがうまい」( $M=2.80$ ,  $SD=0.96$ )、であった。

表 4. 自己効力感の基礎統計

No.	質問項目	M	SD
3	初めはうまくいかない仕事でも、できるまでやり続ける	4.00	0.85
17	失敗すると、一生懸命やろうと思う	3.93	0.81
11	面白くないことをする時でも、それが終わるまでがんばる	3.91	0.69
16	難しそうなのは、新たに学ぼうとは思わない	3.76	0.89
6	何かを終える前にあきらめてしまう	3.72	0.88
5	重要な目標を決めても、めったに成功しない	3.63	0.85
23	人生で起きる問題の多くは処理できるとは思えない	3.62	0.92
22	すぐにあきらめてしまう	3.61	0.92
7	会いたい人を見かけたら、向こうから来るのを待たないでその人の所へ行く	3.55	1.02
1	自分が立てた計画は、うまくできる自信がある	3.51	0.90
15	思いがけない問題が起こった時、それをうまく処理できない	3.50	0.98
12	何かしようと思ったら、すぐにとりかかる	3.48	0.92
13	新しいことを始めようと決めても、出だしてつまづくとすぐにあきらめてしまう	3.37	0.97
4	新しい友達を作るのが苦手だ	3.16	1.17
18	人の集まりの中では、うまく振る舞えない	3.13	1.06
10	友達になりたい人でも、友達になるのが大変ならばすぐに止めてしまう	3.04	1.08
20	人に頼らない方だ	3.04	1.04
2	しなければならぬことがあっても、なかなか取りかからない	2.93	1.13
14	最初は友達になる気がしない人でも、すぐにあきらめないで友達になろうとする	2.82	0.96
8	困難に会うのを避ける	2.82	1.06
21	私は自分から友達を作るのがうまい	2.80	0.96
9	非常にややこしく見えることには、手を出そうとは思わない	2.69	1.10
19	何かしようとする時、自分にそれができるかどうか不安になる	2.41	1.01

## (2) 得点化と 5 分類

自己効力感の得点の平均は、76.28 点 (N=93, SD=10.36) であった。得点の分布状況を図 3 に示す。自己効力感得点は 5 群に分類した (表 5)。

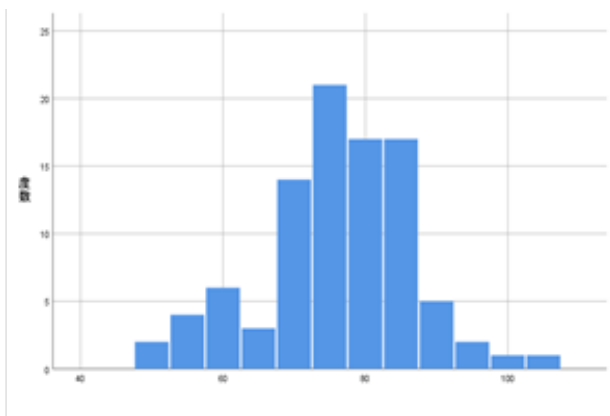


図 3. 自己効力感得点の分布

表 5. 自己効力感得点による 5 分類

分類	低い群	やや低い群	中間群	やや高い群	高い群
自己効力感得点	50~68	69~74	75~78	79~85	86~104
人数	17	17	20	22	17

## (3) 先行研究との比較

本調査では、前述のとおり自己効力感の平均得点は 76.28 点 (SD=10.36) であったが、先行研究の女性の平均得点は、75.31 点 (SD=13.42) [7] であり、得点差は認められなかった。

## (4) 自尊感情と自己効力感の関連

自尊感情と自己効力感の 2 つの尺度の関連性を確認するため、それぞれの得点を用いて相関係数を求めた。その結果、1%水準で優位な正の相関係数が認められた。散布図を図 4 に示す。

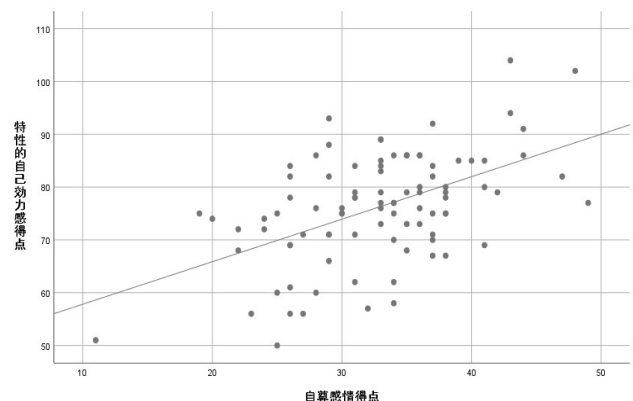


図 4. 2 つの尺度による散布図

また、自尊感情得点と自己効力感得点の 5 群を用いたクロス表からは、どちらも低い者が 7 人 (7.6%) 確認された (表 6)。

表 6. 自尊感情と自己効力感のクロス表

		自尊感情					合計
		低い	やや低い	中間	やや高い	高い	
自己効力感	低い	7	4	3	2	1	17
	やや低い	6	4	2	4	1	17
	中間	3	6	5	2	4	20
	やや高い	2	3	4	5	8	22
	高い	0	3	3	5	5	16
合計		18	20	17	18	19	92

実数

#### (5) 低い群の特徴

7人の平均年齢は33.29歳 ( $SD=5.09$ ), 29歳から39歳であった。

対象者らの自由記述回答は, 7人のうち4人が空欄であった。3人の自由記述内容を以下に示す。

ケース1:

①要望 “口唇口蓋裂についてももう少し学んでおきたかったです”

②近況報告 “昨年長男を出産し, 来月次男を出産予定です。私の子は主人の奇形が遺伝してしまったのか, 2人とも左側の唇顎口蓋裂を持って産まれています。(きます。) 今は子育てと病院への通院, 毎年の手術といった生活を送っています”

ケース2:

①要望 “子供が小さいこと, 旦那の転勤が数年ごとにあることから再就職を躊躇っています。たまに専門雑誌を購読したりもしていますが, ブランクがある自分の能力にも自信がないです。「あじさい会」にもなかなか出席できないので, ネットを利用した大妻の管理栄養士のコミュニティがあると少し嬉しいです。クラスのライングループがあるので, 少し仲間の状況を知ることが出来, 励まされています”

②近況報告 “委託給食会社3年, 療養型病院3年で働いたあとは, 夫の転勤, 妊娠出産子育て中により5年程ブランクが空いているところです”

ケース3:

①要望 “小さな子どもがいてもスキルアップできる環境がほしい”

②近況報告 “子どもを保育園に預けられず退職した”

#### 4. まとめ・考察

現役管理栄養士・潜在管理栄養士の自尊感情と自己効力感を用いて, 女性管理栄養士が有するキャリア発達上の課題について探索的に検討し, 大学教育の質的改善と向上を目指す目的で, 大妻女子大学家政学部食物学科の「あじさい会」で繋がっている卒業生128人に依頼し, 100人から回答

が得られ, 記入ミスを除いた98人を集計対象(有効回収率76.6%)とした。対象者の年齢は, 20代と30代で全体の85%を占めた。取得資格は管理栄養士以外に複数の資格を有している卒業生が3割弱いた。居住地域は9割弱が南関東であった。

自由記述の分析では, 特に「自尊感情」と「自己効力感」がともに低い者に焦点をあてた。その特徴は, 女性がゆえに家族や家庭を優先せざるを得ない状況や保育園に入園できないなどの社会環境により, 離職や再就職を躊躇うことがキャリアに影響していることがうかがえた。その一方で, 結婚による転居や子育てなどで休職中であるが, 自らの力や知識の不足からスキルアップができる環境を望む卒業生もいた。また, 学生時代のクラスの仲間や同窓生との繋がりを望み, 情報交換などができることで, ある種の安心感を抱きたいとの希望が見られた。

#### 5. 今後の課題

卒業生は個別に様々な問題や悩みを抱えており, 個別インタビューによる質的研究の必要性が示唆された。一方で, 継続的な調査研究によりデータを蓄積することで職域による違いなどを検討することの必要性が認められた。

また, 同じ職域で活躍する卒業生同士や職域の垣根を超えた卒業生同士が繋がる環境や個別のニーズに対応した情報を提供することの必要性も認められた。

自尊感情や自己効力感を高め, 専門職キャリア発達を構築できるカリキュラムの必要性が示唆された。

#### 謝辞

調査にご協力頂いた卒業生の皆様に感謝いたします。

#### 付記

本研究は, 平成29年度大妻女子大学戦略的個人研究費(S2906)「女性管理栄養士が有するキャリア発達上の課題」の助成を受けたものである。

#### 引用文献

[1] 五十嵐美絵ほか(2011)「市町村栄養士の事業マネジメントに関する自己効力感とその要因」『栄養学雑誌』, 69(3), pp.148-159.

- [2] Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton Univ. Press.
- [3] 山本真理子ほか(1982)「認知された自己の諸側面の構造」『教育心理学研究』, 30, pp.64-68.
- [4] Bandura, A. (1977) Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, 84, pp.191-215.
- [5] 成田健一ほか(1995)「特性的自己効力感尺度の検討—生涯発達利用の可能性を探る—」『教育心理学研究』, 43, pp.306-251.
- [6] Sherer, M. et al. (1982) The self-efficacy scale: Construction and validation. *Psychological Reports*, 51, pp.663-671.
- [7] 堀洋道ほか(2001)『心理測定尺度集 I—人間の内面を探る<自己・個人内過程>—』サイエンス社, p.40.

(受付日：2018年6月29日, 受理日：2018年7月13日)

### 彦坂 令子 (ひこさか れいこ)

現職：大妻女子大学家政学部食物学科教授  
管理栄養士スキルアップセンター長

大妻女子大学家政学部食物学科管理栄養士専攻 卒業  
専門は給食経営管理論

現在は多領域で活動する管理栄養士のスキルアップに向けた支援を行っている。

主な著書：給食経営管理論 (共著, 医歯薬出版), 給食経営管理実習 (編著, 光生館)